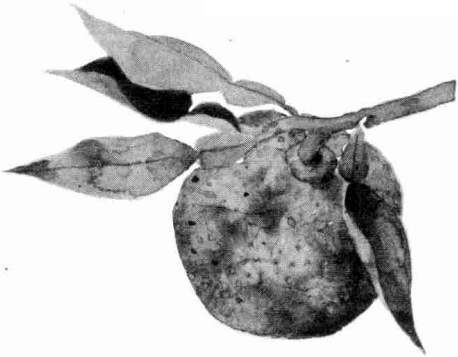
5

うず潮・女家族



林芙美子作品集
5
うず潮・女家族
（全）
昭和39年11月10日　第一刷発行　**定価 320 円**

著者　林　芙　美　子

発行者　斎　藤　修　一　郎

印刷者　慶昌堂印刷株式会社
東京都文京区武島町２２

発行所　東　都　書　房
東京都文京区音羽町3-19
講談社ビル内　振替東京
７２７３２

落丁本，乱丁本はおとり替えいたします。若林製本

目次

うず潮……三
女家族……一五七
折れ蘆……二三三
匂い菫……二三九
解説　戦後の女性と家庭を描く　和田芳恵……二六三

装　文
帧……堀
子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

うず潮

すべてを無視して、時が流れてゆく。
遠い旅路をゆく昼の雲。
「さあ、お馬に乗って、——おや、なぜ怖いの？　悠ちゃんってば、お馬に乗るのよ」
大丸百貨店の屋上。電気仕掛けの木馬が、スイッチがはいると、急に激しい音をたてて震動を始めた。かあっと陽の照りつける、屋上庭園の片隅。四頭のはげちょろけの木馬の背中に、子供達がしがみついて興奮している。
「ほら、女の子だって乗ってるじゃないの、男のくせに、悠ちゃんの意気地なしねえ」
千代子のひざに、しっかりと、両手を巻きつけて、悠一は奇形な木馬の震動に怖れをなしている。白い紙パナマの小さい帽子が薄汚れている。急に荒ら荒らしく手を引いて、千代子は鉄格子を張りめぐらした方へ歩いた。悠一はへとへとになって旅に疲れている。すねて、泣きながら歩いた。
ボタン穴のような盆地の、京都の街一面に、かげろうが舞い、黒い屋根がわらの反射が、空の下で、油光りしている。焼けない街。思い出の町。——千代子はじいっと、暑い陽射しの中に立って、下界の街をみおろした。時々、その下界から、なまぬるい風が吹きあげて来る。
破傷風のようにきずついた、東京の、あの見果てぬ夢のような、愛しい都会のいとなみが、かえっていまはなつかしく思い出される。黒谷の起伏。大文字山。瀝青を塗った、ひくい山々に囲まれた小さい街の中から、ラジオや、市内電車や、ジープの音が、あらん限りの音響をたてている。千代子は眼の中が茫っとかすんで来た。涙の中に景色がとけて行った。
「お母さん、おうちへ帰ろうよ……」
「どこへ帰るの？」
「東京のおうちよ……」
「東京のおうちなンて、もう、帰れやしないのよ」
「どうして？」
私たちはなぜ、ここへ来たのだろう。「どうして」と尋ねられて、千代子は答えることが出来ない。意味

もなく、下界の音が浪の音にきこえる。地平線のない、浪のうねりの中に、遠く流されて来た不安。
「お母さん、何か食べたい……」
「悠ちゃんは、どうして、そんなに、よく、おなかが空くンでしょうね」
千代子は大きい手提げから、パンを出してやった。悠一はつまらなそうに、黒いパンを口へ持っていった。突然、うしろの方で、子供達のさわぐ声がして木馬の金具がぴかぴか陽に光りながら、震動を始めている。どの木馬にも子供が乗っている。
「おばさまはまだなの？」
「もう、じきよ。ここで待っているのね」
うつろな太陽の光が、無慈悲に照りつけている。ぐっしょりと汗になる。千代子は耐えられない。孤独であった。早く来てほしかった。一つの運命をつかみたかった。
これ以上の地獄でもいいのだ。幻影でない現実がつかみたかった。
「お前だけが不幸なンじゃないよ。俺だって追放者で、当分教師も出来ないとなれば、何か、前途のことも考えなければならん。——第一、野人になって、世間へ出てみれば、ものの見分けというものがさっぱり判らん。お前のような未亡人も掃き捨てるほどいる。俺のような追放者も掃き捨てるほどいる。だからといって、この年になって、自殺をする元気もないしね。……どうにも仕方がないじゃないかね。——いまさら、お前たち二人をいれてみたところで、ともだおれだ。乞食になる覚悟もまだ出来んよ。お前はお前で、苦労でも、まだ若いのだもの何とかやって行くさ……」
義明が言った。
別に、親子二人の口を頼るわけではない。千代子は力いっぱい働いてみるつもりであったのだ。お前たちは置けないといわれてみると、千代子はさっさとあきらめてしまった。
「俺は手紙で、京都へ来るのは無駄だと書いたんだがねえ」
顎鬚の濃い、四角い、無表情な顔が、長年の、教職生活にあった、何とない冷酷さを物語っている。
義明は、千代子の長兄で、今年三十九歳である。——二番目の隆雄は三十六。陸軍の主計大尉で、戦争へ出たまま、今年でまる七年。シベリアにいるという消息を聞いたきりで、まだ復員してはいない。——三番目の姉の昌子は、税務官吏にかたづいていたけれど

も、大阪で戦災にあい、そのうえ流産がもとで、長らく患っていて、半年前に亡くなってしまった。千代子とは四つ違いの二十九歳。

ふと眼をあげると、四つの塊りのような雲が真上にあった。下界のどこかで、かすかに鶏が鳴いているような声がしている。

四つの奇妙な雲の姿。一番遠くにいる大きい雲は、義明のような冷酷無情。あとはちまちまと、兄妹よりそったまま、三つの雲が、少しも動かない。

「お母さん、水が飲みたい」

悠一が、まずいパンに退屈して千代子に半分戻した。

「こんなところに水はないのよ」

「だって飲みたい」

「いまに、仙子さんが来たら、一緒に冷たいお茶を飲みましょう」

だいぶ待ったような気がする。

千代子は、今朝、義明に言われた言葉をじいっと思いかえしていた。掃き捨てるほど未亡人がいるという言葉が胸から離れない。未亡人という微妙な謎が、なかなかとけない。太い支柱としての良人に、すべてはあなたまかせで暮していた五年間。短い五年の月日が、良人の死によって、急に燭が消えるようなはかなさで、四囲いちめんが、まことに心細い海原になってしまった。未亡人と言われるような、不安な幻像が少しも湧いて来ない。世間の未亡人観がただおかしいのみ。

「お母さん、おばさまだよ」

仙子が、眼もさめるような、ワンピースで、黒いハンドバッグを大きく振りながら走って来た。割合、晴れ晴れとした顔をしていたが、徒手でいるのが妙だった。

「ああしんど……悠ちゃん、お待ちどおさま」

仙子は、植木台のふちに腰を降すなり、靴をぬいで、スカートをまくると、紅いガーターをはずして、絹くつ下をぬいだ。

「一足六百円のくつ下も、電線病にでもかかると大変だから、ぬいじまうのよ」

「逢えたの？」

「うん、逢った」

「うまくいったの？」

「それが、あかんね」

急に仙子の言葉が変ったので、それが、かえって不

首尾らしく、哀れに見えてくる。仙子はぬいだくつ下とガーターを、くるくるとまるめてハンドバッグにしまうと、ついでにピースを出してくわえ、ライターで火をつけた。一服、うまそうに吸いこむと、ふうっと息を吐いて、眼をちょっとつりあげながら、

「それがさア、一文にもならないのよ。首くくる覚悟でもなきゃ駄目。——京都人って、さわりをしてみせなきゃ信用しないのだもの」

悠一がまた鼻を鳴らしている。

「仙子さん、降りましょうよ。このひと、咽喉が乾いているのよ」

四つの白い雲はもう消えていた。

森閑とした、木馬の前を通って、階段の降り口まで来ると、悠一は暑さと疲れにまいったのか、ふらふらと階段にへたばってしまった。

「すっかりくたびれちゃったのね。さアお母さんが抱っこしましょう……」

仙子に重い手提げと風呂敷包みを渡して、千代子は、ぐったりしている悠一を抱きあげた。ふっと、良人の手ざわりがする。——仙子の話が駄目ならば、もう一度、義明のもとへ戻らなければならない。しかも仙子を連れて……。自分も疲れているせいか、馬鹿に悠一が両腕には重かった。悠一はうとうとしている。人の波がごったがえしているデパートの中を、やっと階下まで降りる。急に白い道の反射が眼にしみる。

柳の馬場、六角下ルの、古風なしもたやの通りまで、千代子は悠一を抱きとおしてもどった。

「私、何だかおっかないわ」

「いいのよ。どうせ一晩だもの、大阪へもどるったって、また、待ちあわせるのが大変よ。ねえ、ここまで来て、変なこと言わないで……」

鼠の抜穴ほどな狭い路地をぬけて、坂本義明と表札の出ている、紅がら塗りの、細い格子を開けた。石畳に水が打ってあるので、ひやっとする。だれも出て来ない。

千代子は、とっつきの暗い二階へ上って行った。くの字に曲った梯子段を、仙子も、千代子の後から上って行く。

見逃しを食った罪人のように、足音を殺して。荷物の積み重ねてあるところから中の間の部屋の襖が開いている。誰かが大の字に寝ている。義明とは違う。いびきをたてて寝ている。黒い洋袴に白いYシャツが、天窓の光線で浮きたってみえた。

千代子は本箱の前に子供を降して、そっと寝かしな

から、見知らぬ若い男の寝姿を見ていた。

何の物音もない。

危険区域を脱してほっとしたと思うと、穴蔵のようなところに、洋酒の空びんが光っている。息をはずませて近づいた。耳もとを、地鳴りのするものが走った。ぱっと眼を開けた。坂本先生の二階にいるという事にやっと気がついた。くるりと寝返りをうつと、納戸の昏さのなかに、馬鹿にはっきりとした黄いろいものと、淡い水色が浮きたってみえる。杉本はちょっと首をあげた。これも眠っている様子だ。

若い女が二人、真中に子供らしき寝姿も見える。黄いろい方の女の顔だけが、こっちをむいている。水色の顔は、むき出しの腕で隠れて見えない。

坂本先生の家に、こんな派手な色彩があったとは気がつかなかった。杉本は、正面に見える黄いろい顔をじっとみつめた。肌浅黒く、南方型の骨格。鼻がちょっと持ちあがっているが、さほど下品ではない。眉は男性型の気丈さで、唇は肉厚く大きい。眼は閉じているので、満月か半月か、秀麗なところは、まず起きてからでないと判断が出来ない。

重ねた長い裸の脚のかっこうが馬鹿に魅力的だ。水色の方は、脚を曲げているせいか、小柄に見える。腰の線が、ふっくりと盛りあがっている。まるい金魚鉢のかたちだ。裸になったら、ルノアールのような豊年型の美しい肉体であろう。杉本は水色の方の脚がのびたので、ちょっと眼をそらした。白い柔らかそうな腕の肉づきが眼に残った。

天窓から西陽が射しこんでいる。

中庭に水を撒く音がしている。

京都人は、朝から晩まで、土に水を撒く執念があるのに違いない。

坂本夫人は、昔から少しも笑わないひとであったが、久しぶりに訪ねてみると、馬鹿にあいそがいい。坂本先生も少しは浪人の辛さが身にこたえたであろう。馬鹿に金の話ばかりしている。敗戦のあと、人の気も変った。

兎角、後輩を見下し勝ちの、いかにも、聖人君子を気取っていた坂本義明も、浪人になってしまうと、裸に下帯一つになった感じで、平等に話しあえる気安さがある。

高等官何等とかの位がなくなれば、どっちにも、邪魔なついたてがなくなった。「ところで、杉本君は」という癖も、今度会ってみると、「ところで杉本さん

は」という平等な言葉にあらたまっている。至極当然なことだけれど、杉本には何となく愉快である。

天窓を眺めながら、たっぷりと昼寝をさせて貰った感謝で、ここ数年のめまぐるしい身辺を考えてみる。身にこたえる事もあった。辛いことが大半だったが、良薬口に苦味しの哀愁を感じる。

「杉本さんー」

階下から義明が呼んでいる。

水色の方が、顔から腕をはなして、不意に起きあがった。眼は満月。杉本と顔を合わせた。お互いに知らぬ顔ではあったが、涼しい眼に誘われて、杉本もむくりと起きた。

「杉本さん、よく眠れましたか？」

「はア、ぐっすり眠りました。岡山から立ちどおしなンですからね」

顔を洗って、濡れ手拭でむきだしの腕を拭きながら、杉本は、水を打った庭近くに坐った。

「まア、こちらにお出でなさい。——何しろ、私も女房の里の食客みたいな身分で、思うような事は出来ンが、茨木にいた時のように、気兼ねをせんで、さア、こっちへお出でなさい。何もないンでねえ……」

杉本は言われるままに、食卓の方へいざり寄った。相当疲れた筒っぽ浴衣に、黒いメリンスの帯をぐるぐる巻きにした義明が、

「配給のビールです。一つ」

「いや、これはどうも……」

泡が盛りあがっている。義明も自分のコップにビールをつぐと、お互いにコップをささげて、何となく祝しあった。——二階で子供の声がした。杉本は、さっきの水色の姿が、ふっと心に来た。黒田清輝の湖畔という、船の美人のおもかげに似ている。

紫檀の食卓には、胡瓜のなます、怪しげな色をしたソーセージ、何かのつくだ煮。とかく女というものは、欲が深いのだからと聞かされていたので、坂本夫人にはまず、のっけに土産物をひろうしたほうがよかろうと、杉本は、リュックをみんな坂本夫人にあずけた。米一升だけのこしておいて貰えば、あとはみんなおつかい下さいという事で、坂本夫人は正直に茨木時代とは雲泥の差で、馬鹿にご機嫌がいい。

「世の中も、こう変化してしまうと、手の出しようがないもんですな。——杉本さんはまだ前途洋々だが、僕はねえ、おさきまっくらで、何をしていいのだかさっぱり判らん始末ですよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

「いや、そりゃアご同様で、復員して来て、僕は何もかも浦島太郎です。どうにもやりきれない気持ちですなア」
「まア、慎重にやるンですな。何か、いい仕事でもあったら、僕の事も思い出して貰うンだなア。こうなれば、一年生に戻って、僕は何でもやるつもりですよ」
義明は舌を鳴らしてなますを食べた。
「杉本さん、何年、行ってたのかな？」
「僕ですか？　四年ですよ。最後がジャワ」
「はは、ジャワ？　いいところですか？」
「暮しいいところですね。まア、すべては夢ですよ」
「いや、僕も、そう思うよ。誤ってしまった感じだな。はるかに深情をおこすで、考えても甲斐のない事だが、まア、昔は昔、いまはいまと悟るより仕方がない、――さア、もう一杯どうです」
子供の泣き声がした。
「お客様ですか？　二階におられた方……」
義明は急に暗い顔になって、
「ああ妹です。これも、戦争の犠牲者でね、未亡人になりましてね。つれあいが琉球で戦死して、子供をかかえて、どうにもならん組です。この戦争で、未亡人が相当いるンでしょうが、いったい、どうなるンですかな……」
黄いろいほうが義明の妹なのか、水色のほうがそうなのか、杉本にはちょっと判らなかった。
ああ未亡人か……暗がりの中にただよう、女の哀しい顔つきが、いくつか杉本の瞼に浮ぶ。真紅の火焔のなかに、兵隊が次々に笑って死んでゆく。思い出のなかの意識。明滅する兵隊の顔。地上すれすれのところできまる、一つ一つの運命の結果が、遠慮えしゃくもなく続いている。
戦争の思い出は、杉本の心には痛かった。故国へ戻ったら、その日から何も思うまい、考えまいと思ったが、思い出はなかなか手早く切りとるわけにはゆかない。月日をまって、思い出の色あせてゆくのを頼むより仕方がない。何ということもなく、杉本の口辺に、アバボレボアット（仕方がない）というマライ語が浮んだ。
「あなた」
坂本夫人がはいって来た。
「何だ？」
「千代子さんたちも、ここでいいンでしょう？」
義明は、わざと渋い表情でうなずいた。

「千代子さん、悠ちゃん、こっちへいらっしゃい。そのお友達の方もご一緒にね」
坂本夫人が浴衣のアッパッパから、汚れた前かけをはずしながら大きい声で呼んだ。
子供の背中を押すようにして、水色の服が畳に膝をつけてはいって来た。杉本は、ははあ、これが未亡人なのだなあと思った。前髪に高いウエーブをつけて、襟もとを上の方へ巻きあげた髪に結っているせいか、首が細く見える。紅を塗らない唇もとが清潔そうで、はっきりとした眉目は少年のようなおもむきがある。ほんの少しやぶにらみなところも愛らしい感じだ。
子供は母親そっくりで、おかっぱにしているせいか女の子のように見えた。手製の服を着ていても、いかにも都会そだちらしいひよわなところが見える。その後から、黄いろい服が、悪びれた風もなくすっとはいって来て、襖ぎわであいさつをした。
部屋の中が急にぱっと明るくなった。
「私の学校友達で小谷仙子さん。今度ご一緒にこっちへ来たンです。——大阪へ帰るっていうのを、無理に来て貰いましたの……」
千代子が杉本のほうをちらっと見た。
面長な、青黒い顔。はっきりと人を見すえる眼もとが、正直そうな、意志の強そうな男に見えた。
「おい、ビールはないのか？」
「ええ、一本きりですよ」
「杉本さんはいける口なンだが、残念だな」
「配給なンですもの、ありませんよ」
「酒と名のつくものは何もないのか？」
杉本はあわてて手を振って、
「いや、もう沢山です。おかまいなく」
「こちらは杉本晃吉さんといってね、五月にジャワから復員して来られたンだ。——お前は知らんかねえ、俺が岡山の中学に勤めていた時に、こちらに世話になっていたンだよ。茨木にいた頃もちょっとおられたンだ。早稲田の英文科を出られた方で、中学が大阪で一緒なンだ」
千代子はていねいに挨拶をした。
「明日、東京へ行かれるンだよ」
杉本はあわてて不器用に首をさげた。
ビールが一口。胡瓜なますに、怪しげなソーセージで、それもほんの少々。そのあとがまっくろな麦飯軽く丼一杯では、旅のこころが何ともしゃくぜんとしない。

義明は杉本に、一、二時間、京都の夜を歩いてみないかと誘った。杉本はすくわれたような気がした。二人の男は、何のためらう事なく戸外へ出て行った。

まず京極へ道をとった。黄昏の狭い町では、女の子が野球ごっこをしている。薄紫の淡い黄昏の空が狭い町の上にたなびいている。

義明は紺飛白に着替えて、もっともらしくステッキをついていた。杉本は白いYシャツの上に、黒い上着を引っかけて、義明の下駄を拝借におよんだ。水虫にたたられていたので、靴ばきは気持ちが悪い。

「杉本さん、どこかで一杯やりましょう……」

「いいですねえ」

「京都だけは別世界でしょう……完全無欠に残ったンですからなア」

「奇蹟ですよ。なかなか味な残りようですな。中味は知りませんが、まず、昔どおりに、おっとりとしていて、僕なんかほっとします」

「いや、おっとりなぞはしていませんよ。すっかり、京都も変った。それに、大阪方面から人間が沢山はいりこんでいるンで、すべてが勢いこんで流れていますよ……」

京極を出て、賑やかな花遊小路を抜けて、四条へ足をのばした。

「若き未亡人は、ずっとこちらにおられるンですか？」

「ああ、妹ですか？　いや、京都へ置くというわけにはゆかんので、近々、東京へ帰します。――亭主の家の方では、子供を引きとるから、どこへでも、気兼ねなく縁づいたらいいだろうというンですがね。本人が子供を手離したがらンのだし、第一、お互い好きあっていたというしぎだったので、まだ、何の気も起らぬというありさまで……ちょっと、不憫なところもあるのです。亭主の里が仙台でね。これも、暮しはあまり楽なほうじゃないときているンですよ」

「これからが苦労ですな」

「そうなンですよ。――いまさら戦争を恨んでみたところで、どうにもならんのだが、まさか、こんなみじめな敗けぶりになろうとはねえ……」

骨董屋の前で、杉本は陳列をのぞいた。黒うるしの台の上に、能面がいくつか並べてある。その中の鬼の面が杉本の眼にとまった。青いくまどりをして、耳もとまで裂けた口が笑っている。いつの頃のものかは判らないけれども、かなり古いものであろう。杉本は、急にめまぐるしかった半生の運命が心に出た。

あしたにかがやける其の華あるも

夕べにすでにこれをうしなう
人生　寄のごとし
憔悴　時有り。

鬼の面が、静かに、こんなことを語っているようだ。杉本は陶淵明の句だったかなと、ふっと思った。

「杉本さん、いま、金の値段はどの位しとるもンですかね？」

義明が、ステッキをこわきにして、陳列を覗きこんで尋ねた。

「ほう、坂本さん、そんな宝物をお持ちなんですか？」

「いや、家内のおふくろがね、小さい金ばいを一つ持っているンで、時機をみて売りたいと家内がいっているンですよ。時価どの位のものかと考えてね……」

いまなら、大したものだろうと思ったが、杉本には、金の値段なぞ、興味がなかった。

「ぶっそうですから、まず、泥棒にはいられぬ要心がいりますな」

「いや、どうも……」

四条通りの、銀行の建物の横をはいった。とっつきの、小さい酒場に義明は杉本を案内した。

はめごうしの油障子に、小たけと意気に崩した文字が肉太に書いてある。

「たびたび来るンですか？」

あら、おいでやすという、ずんぐりした女中の馴れ馴れしい様子に、杉本は義明を見てにやりと笑った。

「ここの焼酎はちょっといけるンですよ」

塩気のないような、胡瓜もみのつきだしに、焼酎がコップ一杯ずつあてがわれた。おや、こっこも胡瓜だな。杉本はちょっとおかしくなった。ピースを出して義明にもすすめ、自分も一本咥えた。退屈だ。何となく人生が退屈だった。先客は、薄べったい鞄を台に置いて、会社員らしき男が二人。ひそひそと話しあっている。

焼酎は馬鹿に水っぽい。内容空疎な飲物。それでも、一杯ぐっとひっかけると、時の勢いで、幾分かは酔う。後を引く。胡瓜は見ただけで、白々しくなる。杉本が、何か出来ないかというと、馬鈴薯のサラダにソーセージ。杉本は味けなくなってきた。

「さア、坂本さん、飲みましょうや」

義明は妙に煮えきらぬ返事で、なめるような飲み方をしている。

「おかわりッ」

杉本は、空のコップを台にこつんと置いた。何がいける焼酎なのだと、杉本は、腹立たしくなっている。

「杉本さん、まだ細君は貰わないの？」
妙な話題である。杉本は、気持ちをはぐらかされたような気がした。
「女はこりこりですよ」
「どうして？」
「無駄なことですな」
焼酎のかわりがきた。杉本は、半分ほどぐっと飲んだ。額のへんが、ちょっとしびれるような気がしたが、瞬間に、そのうずきが消えてゆく。もうあとは爽涼とした塩梅になり、獣的な力が湧いて来た。上着をぬいで台の上に置いた。
「まず、目的でもさだまったら、奥さんを貰うんだね。みめうるわしく、才たけてというところを貰うんですよ。——女は沢山いる。金持ちの娘がいいな」
「金ばいを、百個ばかり持っているのを貰いますかな」
義明はあわてて左手を振りながら、あやまったかっこうをした。
「目的目的といっても、僕たちのようなものには目的なンかありませんよ。まかりまちがえば、泥棒にでもなりかねない。——世の中がすっかり判らなくなっているンですから、坂本さんに、まず、世の中はどんな風に変化しているのか、ご教示願わなくちゃならンのですよ」
食事が済むと、悠一は疲れて、畳にごろりと横になって眠った。
男達が出て行ったあと、三人の女の間に、杉本晃吉が話題になった。
——始めに結婚をしたひとが、一年ぐらいで亡くなり、二度目は職業婦人と恋愛関係におちて、固い約束をしたのだけれども、杉本が戦争に行っている間に、その婦人は他の男と結婚をしてしまった。——戦争から戻って来た時、杉本はちょっと自棄になっていたのだけれど間もなく、また再度の応召で、戦地へ行って、二年目に終戦になり、今度の復員なのだと、坂本夫人の説明である。
「まア、随分気の毒な方なんですのね」
仙子が馬鹿に同情していた。
人を人とも思わないような、雑な感じのするたいどが、千代子には、仙子ほどの同情をよばなかった。
二階で眼が覚めた時、じろじろと人の寝姿をみていた様子が気にくわなかった。眼が覚めて、お互いに顔を見合せた瞬間、杉本はぷいと立って、目礼一つする

でもなく、階下へゆうゆうと降りて行った。厭な感じだった。

「私ね、杉本さんが、突然見えたでしょう……あんたを急に思い出して、あのひと、千代さんを貰ってくれないかと思ったのよ」

「あら、いやだわ、お嫂さん、私、およそ、あんなひときらいよ。——私、まだ、要太郎の事でいっぱいなの……一生、お嫁に行こうなンて気持ちありませんわ。——要太郎の戦死と同時に、私の女の幕は終ったンですもの。悠一が可哀そうですよ。いくら、こんな時代になったからって、私、二度とかたづこうなンて気持ちないわ。——未亡人、未亡人なンて言われる事だって、ぞうっとしてるわ。——要太郎はまだ私たち、親子のとこで生きていますよ。私、そう思って慰めているンですの……。兄さんが置いて下さらないから、こんなことを言うンじゃないけど、もう一度、私東京へ戻って、一生懸命働いてみようと思っています。かえって勇気が出たの……。私、歩きながらだって、あのひとの事を始終思ってるわ。私達といつも歩いてくれてるような気がするンですもの……。人の思いって、一心に思いつめれば、死んだ人間だって、きっと守ってくれない筈ないって思うわ……」

千代子は、扇子で、悠一の足もとをあおいでやりながら、涙ぐんでいた。

「そりゃア解りますよ。でも、そう言ってても、千代さんは、まだ若いンだもの、このまま生涯を独りだなンて、哀れじゃないの」

千代子は返事もしなかった。

良人を亡くした女でなければいまの千代子の気持ちは解って貰えないと思った。しかも戦場で亡くなっているだけに、千代子は、耐えられない哀しみを味ったのだ。壮健で、にこにこ笑っていた日常の、あの声や、あの皮膚や、思いや、二人だけの、愉しい秘密がいまも影絵のように、くるくると胸の中いっぱいに回っている。——「おい、今戻ったよ」どこからか、元気な声で、帰って来そうな気がする。そしてまた長い留守をあずかっているような気もしてくる。

「私、杉本さんって、ちょっと面白い人みたいに思うわ。あのひと正直なンと違うかしら？」

仙子が早口にいった。

情というものが、少しずつこわばってきている。未亡人と言われることを、ぞっとするほど厭だと思いながらも、千代子は、日がたつにつれ、段々心が乾いて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo